

2026 年燧灘カタクチイワシ漁況予報

2026 年 7 月 2 日
香川県水産試験場

1. 水温

2026 年 1～6 月の燧灘東部における水深 10m 水温は、平年と比較し、1～2 月は「平年並み」、3 月は「かなり高め」、4～5 月は「高め」、6 月は「平年並み」で推移している。

※平年値の算出期間：2016 年から 2025 年までの 10 年平均

- 平年並み : $0\sigma \leq \text{平年偏差} < 0.6\sigma$ (σ : 標準偏差)
- やや高め (やや低め) : $0.6\sigma \leq \text{平年偏差} < 1.3\sigma$
- かなり高め (かなり低め) : $1.3\sigma \leq \text{平年偏差} < 2.0\sigma$
- 著しく高め (著しく低め) : $2.0\sigma \leq \text{平年偏差}$

カタクチイワシは水温が約 13℃以上になると産卵を始めることが知られており、今年は、4 月から 5 月にかけて産卵が始まったものと考えられる。

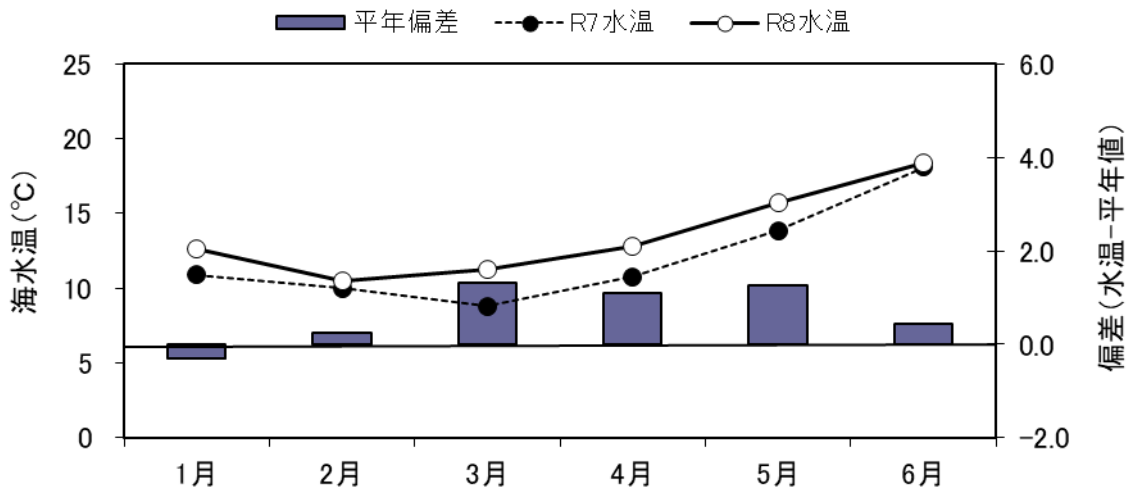


図. 燧灘における 10 m 水温

2. カタクチイワシ卵および仔魚の出現状況

カタクチイワシ卵および仔魚の出現状況について調べるため、4月上旬から6月下旬の間に計6回の卵稚仔調査（浅海定線調査を含む）を行った。なお、卵・仔魚の採集はマルチBネット（口径45cm，目幅0.33mm）の鉛直曳きで行った。

卵は4月上旬調査時から確認され、4月下旬から5月下旬までは平年を上回って推移していたものの、6月上旬以降、平年を下回って推移している。仔魚は、4月下旬調査時から確認され、卵同様、4月下旬から5月下旬までは平年を上回って推移していたものの、6月上旬以降、平年を下回って推移している。

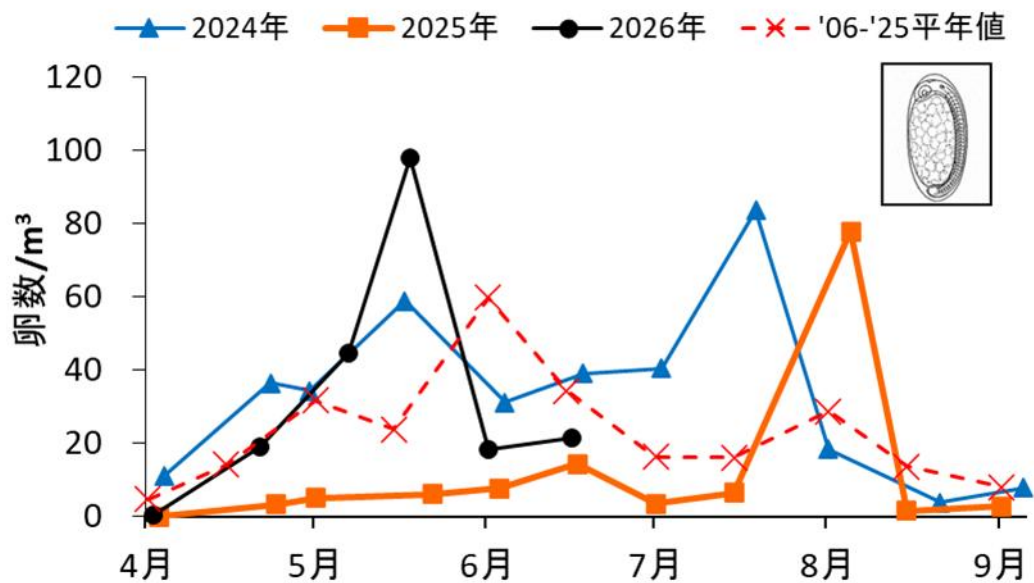


図. カタクチイワシ卵密度の推移

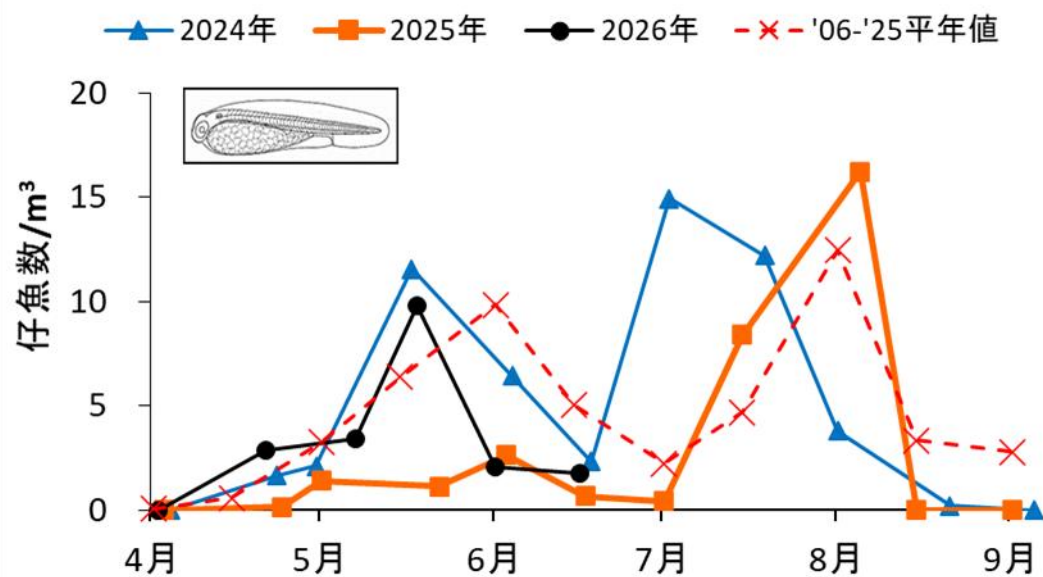


図. カタクチイワシ仔魚密度の推移

3. プランクトンの出現状況

カタクチイワシ成魚の主餌料であるカイアシ類成体密度については、4月上旬以降、平年を下回って推移している。そのため、5月におけるカタクチイワシ雌親魚肥満度は8.1となり、平年の9.2（直近10年間の平均値）を大きく下回った。

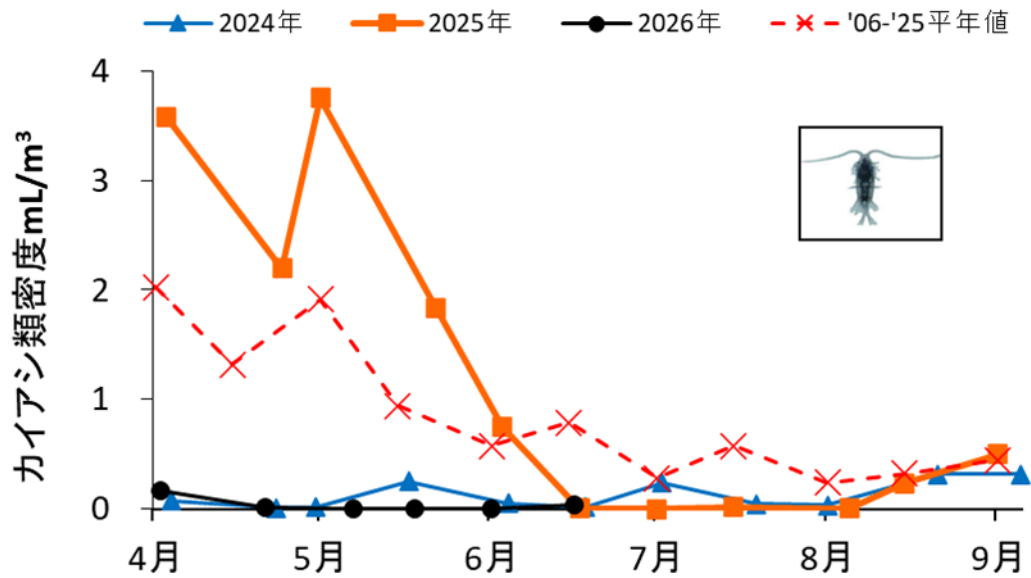


図. 335 μm 以上カイアシ類成体密度の推移（概数）

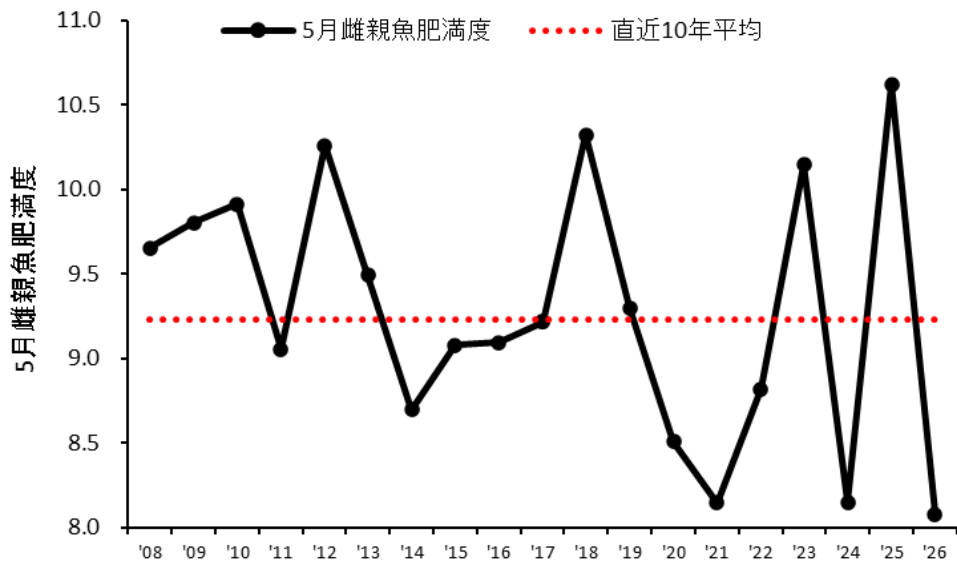


図. 5月におけるカタクチイワシ雌親魚肥満度の推移

4. カタクチイワシ漁期予報

6月下旬から漁獲されるチリメンは、5~6月に燧灘で産卵された卵がふ化、成長したものである。この時期のカタクチイワシは1日0.6~1.0mm程度で成長し、漁獲サイズの30mmに成長するのは、ふ化してから約25~35日後と考えられる。したがって、早いものでは、5月下旬にふ化したものが6月下旬頃からチリメンとして加入し始めるものと推定される。

○カタクチイワシ仔稚魚の加入量予測

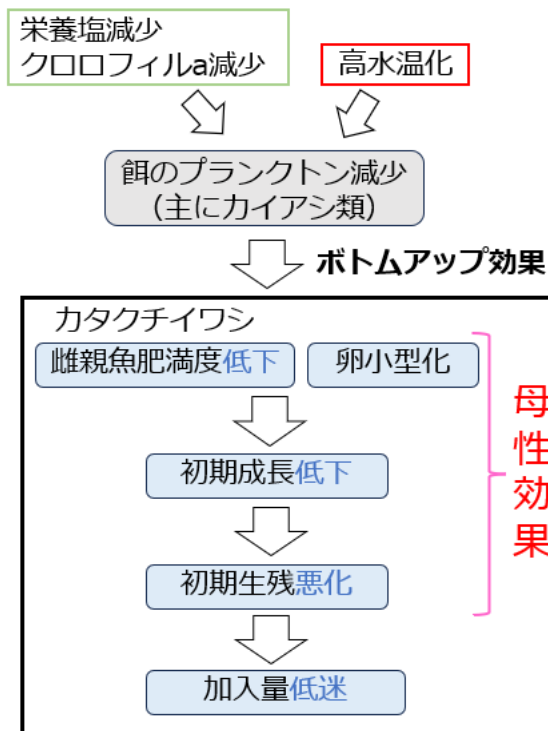
卵及び仔魚密度は、4月下旬から5月下旬までは平年を上回って推移していたものの、6月上旬以降、平年を下回って推移している。これは4月から6月までの海水温が平年を上回っていたため、産卵が早期化したことが要因として考えられる。

また、餌料環境について、カタクチイワシ成魚の主餌料であるカイアシ類成体密度は4月上旬以降、平年を下回って推移している。そのため、5月におけるカタクチイワシ雌親魚肥満度は8.1となり、平年の9.2(直近10年間の平均値)を大きく下回った。

これまでの調査結果から、雌親魚肥満度が高いほど、卵質がよくなり、仔魚の成長、生残が高くなることが示されている(母性効果)。今年度は、カタクチイワシの主要な餌となるカイアシ類成体密度が平年を大きく下回っており、雌親魚肥満度が近年で最も低かったため、卵質が低下している可能性が考えられる。

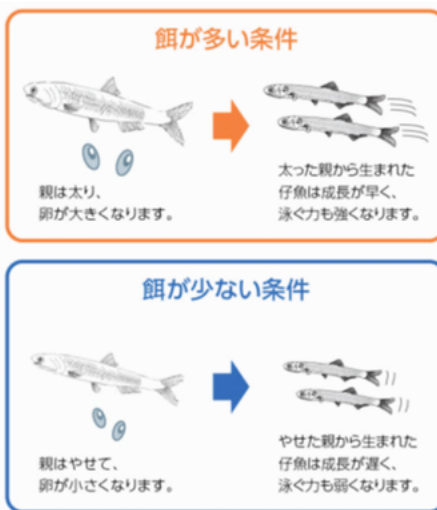
これらのことから、今年度のカタクチイワシ仔稚魚の加入量は、平年を下回ると考えられる。

●野外調査



加入高水準期 vs 加入低水準期
(2002~2006年) (2015~2019年)

●飼育試験



(Fujita et al. 2021, Yoneda et al. 2022)